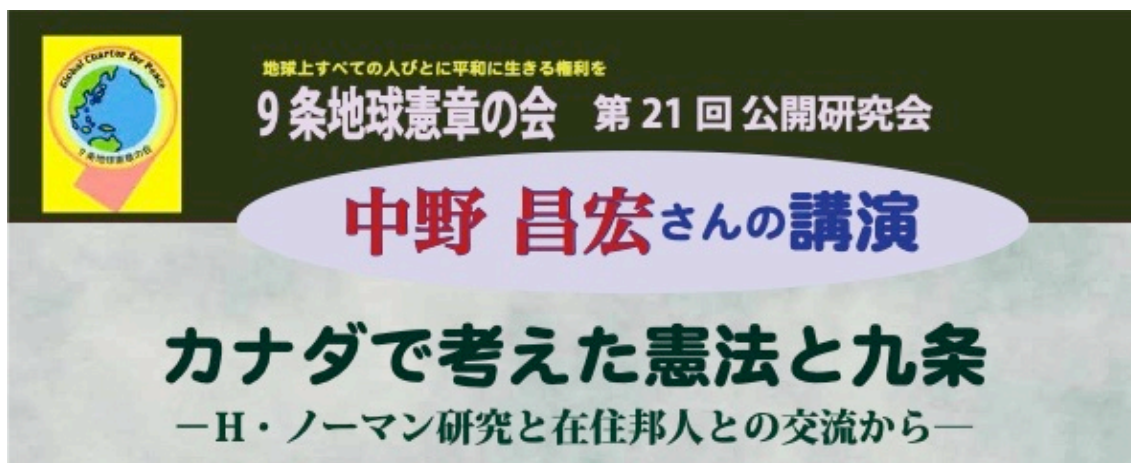


2021年1月11日 第21回公開研究会

中野昌広さん講演「カナダで考えた憲法と九条～H・ノーマン研究と在住邦人の交流から」



今回は、コロナ禍の深刻さを考え、全面オンライン形式で行うことになりました。

講師には、中野昌宏さんをお迎えし、先年のカナダでの研究体験を踏まえた、在留日本人九条の会の活動や、日本国憲法の制定過程にも関わったE・H・ノーマンに関する研究成果などについて講演をして頂きました。

講演：

「カナダで考えた憲法と九条 — H・ノーマン研究と在住邦人との交流から—」

講師：中野昌宏氏 青山学院大学総合文化政策学部教授

(社会思想史・社会理論・社会哲学研究、本会呼びかけ人)

H・ノーマン研究のため、2016年から2017年にカナダのブリティッシュ・

コロンビア大学に客員教授として赴任。

(関連論文)

「日本国憲法思想とその淵源：憲法研究会の『人権』と幣原喜重郎の『平和』」

「E・H・ノーマン＝鈴木安蔵の戦後初会談：その意義と事実関係について」

(著書)

『貨幣と精神—生成する構造の謎』ナカニシヤ出版 2006年

カナダ人のノーマンは日本生まれのすぐれた歴史家・外交官で、第二次大戦後、カナダ外務省からGHQ(連合軍総司令部)に出向し、占領下の日本の民主化・改革に携わり、憲法制定にも関わりました。後に、冷戦下の狂信的なマッカーシズムの嵐に巻き込まれ、1957年に任地カイロで悲劇的な自死を遂げたことでも知られています。

当日の様子↓

<https://youtu.be/Eht8mC-9OMQ>

ドキュメンタリーフィルム↓

https://www.nfb.ca/film/man_who_might_have_been/?fbclid=IwAR1Fojg8CySXRp2gYr7ljRE-E01Q8OPRvZg1gR-9GOF6lmX2QCc22hfBMrY

参考までに

本会事務局長の目良誠二郎さんがFacebookに公開されました感想をご紹介します。

* * *

昨日、オンラインで開催した「9条地球憲章の会」の第21回公開研究会で、青山学院大学の中野昌宏さんの講演を伺って大いに教えられた。中野さんは「9条地球憲章の会」の呼びかけ人だが、3年前の会発足時からカナダのブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)で、カナダのすぐれた歴史家&

外交官であったH・ノーマン（1909～1957）の研究に客員教授として当たられてきた。昨日の講演は、主にノーマンの遺族からU B Cに寄託されたという膨大な資料と蔵書との格闘の成果だった。その中で、特にびっくりしたのは、9条を除く日本国憲法の事実上の原案となった「憲法研究会」案を起草した鈴木安蔵（1904～1983）と、ノーマンが戦前から交流があり、終戦後、GHQに招かれたノーマンと「憲法研究会」案について主に天皇制をめぐる二人が議論していたという事実だった。中野さんはU B C滞在中に、バンクーバー在住の著名な平和活動家である乗松聡子さんに呼ばれ、「バンクーバー九条の会」でもそうしたことを何回か講演されたという。そうしたことを伺いながら、僕は奇妙な感慨に襲われていた。鈴木安蔵は福島県小高町（現南相馬市小高区）の出身で、京都大学時代に学生運動に加わって治安維持法で逮捕され、退学後は在野で憲法学の研究を続け、自由民権運動の理論家で画期的な民主的憲法草案を起草した土佐の植木枝盛の資料などを発掘していた。鈴木が起草した「憲法研究会」案はまさにその成果だったのだ。ノーマンとの関係は、ノーマンも自由民権運動に強い関心を持っていたからだろう。

ところで、先日もアップしたように、福島在住の民俗学者赤坂憲雄さんが、僕の曾祖父半谷清寿（はんが い・せいじゅ）の書いた『将来の東北』（1906年）（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/798585>）という本を激賞した、「百年の計はどこにあるか」という文章を1/3の

『福島民報』に寄せられたばかりなのだが、つい最近わかった事実は鈴木安蔵の父親はその曾祖父が興した小高銀行の支配人代理を務めていたことだった。鈴木と曾祖父が同郷であることは知っていたが、まさか直接の関係があったことは全く知らなかったのだ。赤坂さんも触れていたが、僕たち子孫以外からは忘れられていた曾祖父の本を、1960年代の終わりに再発見し、研究・復刻したのは東北大学の歴史家高橋富雄（1921～2013）さんだった。その高橋さんが書かれた「明治の東北論—半谷清壽の発見」が採録されている『東北開発論』（歴史春秋社、2004年）を、ネット古書店で注文していた。今朝、それが届いた。分厚い本のそのページをめくって驚いた。「カナダのすぐれた日本史研究者であるE・H・ノーマンというかたは、江戸時代の革命的な民主主義の思想家、安藤昌益という人を、戦後新しく一般に紹介して、その本を、

『忘れられた思想家』と題されました。いま、わたくしがここで紹介しようといいたします半谷清寿という人も、それに似たような意味で、まったく「忘れられた先駆者」のひとりです。」 何と、昨夜、ノーマンについて聴き、ノーマンと鈴木安蔵の関係を知り、鈴木安蔵と曾祖父の関係を思っていたところに、高橋さんによってノーマンの書いた安藤昌益と曾祖父が並べられていたのを知ったのだ。 僕は、学生時代に『忘れられた思想家』（岩波新書）を初めて読み、1975年に30代半ばだったジョン・ダワーが編集して出た英文の著作集を、続いて1977年に出た『ハーバート・ノーマン全集』全4巻を買い求め、一時、かなり集中して読んだ。 曾祖父は、19世紀の終わりごろ富岡町夜の森の広大な原野を購入し、開拓して大農場を経営しながら、『将来の東北』を書き、衆議院議員を務めた。 その夜の森の大部分は、2011年の原発事故で今に至るまで「帰還困難区域」と化してしまった。 その曾祖父が開拓記念に植え始めた桜並木の入り口付近で、戦争末期に生まれ、6歳まで育った僕は、原発事故で大きなショックを受け、脱原発運動に加わって今に至っている。 そして、実はバンクーバーで中野さんが講演を頼まれた「九条の会」の乗松聡子さんは、僕が原発事故直後にネットで情報収集する中で知り合った、著名な平和活動家なのだ。 こうして、昨夜の公開研究会で登場した主な人々は、まるで奇跡のように僕の周りにつながったのであった。 本当にうれしい驚きだった。 そして、少々興奮している。